

漁氏物語

今泉忠義
現代語訳一

桐壺
帚木
空蟬
夕顔
若紫

源氏物語

源氏物語 現代語訳 一

昭和49年10月20日 初版 発行
昭和50年 5 月25日 再版 発行

定価 1200円

訳 者	いま 今	いづみ 泉	ただ 忠	よし 義
発 行 者	及	川	篤	二
印 刷 所	(株) 第 一	印 刷 所		

発 行 所 株 式 会 社 桜 楓 社

東京都千代田区猿樂町2-8-13
(郵便番号) 101(振替) 東京 18020
(電話番号) 東京 03-291-5661

Printed in Japan
(著者校印は省略いたしました)
1393-741060-0723

造本には十分注意しておりますが、
万一落丁、乱丁などの不良品の場合
は、おとりかえいたします。

桐 壺 梗 概

- 桐壺の帝の桐壺の更衣を御寵愛になること……………三
- 源氏の誕生……………四
- 御袴着の儀式……………六
- 更衣の病氣・退下・病死・葬送……………七
- 勅使靱負の命婦の更衣の母北の方を見舞ふ……………一〇
- 命婦の復命、帝の御悲歎……………一六
- 源氏の参内……………二〇
- 人相見の予言、臣籍降下……………二三
- 先帝の四の宮（藤壺）の入内、源氏の藤壺に親しむこと……………二四
- 源氏の元服、左大臣の娘葵の上を娶ること……………二七
- 葵の上に親しまず、藤壺を慕ふこと……………三〇

は し が き

一、この現代語譯は、青表紙系の版本中では最善本と稱せられる首書源氏物語の本文に據つた。

一、できるだけ原文に即した現代語譯をと努めたのだけれども、御承知のやうに、現代の口語は原文よりも丁寧語が多く、逆に謙遜表現は今にもなくなりさうなくならぬ少ないのだから、そこにずれの出るのも仕方のないことだらう。例へば、「あなづられ奉る」を「馬鹿におせられ申しあげる」とでもしてみたら、それが現代語かといはれるだらうが、これは、現代語にうつしたなら、こんなにもなるだらうといふところを見せたに過ぎない。こんな現代語譯があつてもいいのではないだらうか。

一、本書は、森昇一・岡崎正繼兩氏校訂の首書源氏物語の本文篇と、今後刊行せられるはずの源氏物語の語法研究篇とともに三部作になる、まづはその初篇に當るといふわけ。

一、現代語譯と本文との對應の便を考へて現代語譯の下にこれに相當する本文篇の頁數を算用數字を以つて掲げることとした。さらに一層の利便を考へて、日本古典文學大系本（岩波書店）の頁數をも括弧内に示した。ただ、大系本卷數については、一々舉げるも煩はしいので省略に従つた。

一、讀者の目を休めるためを思ひ、江戸初期に刊行された繪入源氏物語の卷々のすべての繪を挿繪がはりに入れることにした。

一、大正の頃によくもあれほど精緻な域にまで達してをられたと思はれる三矢重松先生の御講義、つづいて眼光紙背に徹するといった折口信夫先生の御講義を聞かせていただいた筆者には、兩先生の口眞似みたいな口調が隨所

に現れる。ありがたくもつたいないこととも思はれる。それに、古くは萬水一露・首書・湖月抄に玉の小櫛など、新しくは有朋堂文庫本・吉澤義則の新釋以來の諸家のお説をいただいたところも多いのだが、その都度ことわることはできなかった。これはいづれ研究篇で御紹介もお禮も申しあげることにした。

一、思へば、國學院大學國語學研究室の方々には、田邊正男博士・吉川泰雄博士をはじめ、この企畫の當初から一通りや二通りでないお世話になつてゐる。院友國語研究會の會員諸氏もまた、二十年來よくも道連れとなつて歩いて下さつたものだ。そして、亂暴な下書きを淨書して下さつた中村幸弘・小杉商一・中島繁夫の諸氏、校正に眼まで赤くして下さつた山口雄輔・長谷川政次・荒木雅實の諸氏、假名遣などいろいろ厄介な注文を何も彼も引受けて下さつた櫻楓社社長及川篤二氏並びに係擔當の方々、第一印刷の方々。これらの方々あつての本書である。さういふ次第で、心から御禮を申しあげなければならない方々の、何と數多いことか。

昭和四十九年九月

筆者

どの帝の御代だったか、女御とか更衣とか、お后が大勢お仕へ申しあげていらした中に、特に重々しい身分ではないお方で、格別に御寵愛を蒙つていらつしやるお方（桐壺更衣）があつたさうだ。御入内の初めから、自分こそはと氣位の高くていらつしやるお后方（特に女御など）は、目障りな奴が現れたもんだと、蔑んだり嫉んだりしていらつしやる。が、更衣と同じ身分の、あるいはそれよりも低い身分の更衣方は、女御方以上に尚更氣が氣でない。桐壺の更衣は、明ければ退下、暮ればまた参上とお側仕へをするにつけても、他のお后方の心をやきもきさせたので、さうした方々の恨みを受けることが積り積つたためだったのだらうか、ひどく病氣勝ちになつて行つて、何となく心細い氣持で、お里に下つてゐることが多いので、帝は物足りないお氣持で、これまで以上にかはゆくてかはゆくてたまらなくお思ひで、誰が何とけなしても、とても氣兼ねをなさることもおできにならないくらゐ、かうしたことでのひとつの実例ともなりさうなお扱ひぶりだ。お后方ばかりか、公卿や殿上人なども、これではあんまりだと、目をそらしそらしするほど、それはそれは、まともには見てもゐられないくらゐ、大変な御寵愛を蒙つてをられるお方ではある。唐土でもかういふことが原因となつて、国も乱れ、とんでもないことにもなつたんだと、だんだん世間の人もおもしろくない氣がして、誰もこれをどう扱つたらいいのか、もてあましの種にもなつて来、結局はあの玄宗皇帝を溺れさせた楊貴妃の例も引合ひに出さないではゐられなくなつて行くので、更衣にとつてはどうにも恰好のわるいことが多いのだけれども、とにかく帝のまたとないほどのありがたい御寵愛を唯一の頼みどころとしてお后の生活をつづけてをられる。

更衣の父親の按察の大納言は、とつくに亡くなつてゐたのだが、母親（大納言の北の方）は由緒のある家柄の出の昔氣質の人なので、両親とも揃つてゐて、さしあたつて現在は、羽振りのいいお方だと世間にも聞えてゐるお后方にも負けないくらゐ、どんな儀式のある場合にも、何とかやつておのけになつたけれども、格別に取立ててこれといふほどのしつかりしたお世話役がないので、特にこれといった大事なことの行はれる

時には、それでもやはり、頼るところがなく、心細い様子だ。

前世にもお約束が深かつたのだらうか、またとないくらゐ美しい玉のやうな皇子（光源氏）までもお生れになつた。帝は若宮が早く見たいとお待遠がりなさつて、更衣のお里から、急いで参内させて、初めて御覧になると、めつたに見たこともないやうなお顔かたちの赤ちやんだ。第一皇子は右大臣の姫君の弘徽殿の女御腹はらなので、外戚の重々しい点からも、疑ひもなく春宮とうぐうにおなりになる方として、世の人々も大切に思ひ申しあげてゐるのだが、この若宮のお美しさに比べると、とても肩を並べることもおできにならないくらゐだつたので、帝は大切な第一皇子としておかはいがりにはなつても、一通りに過ぎないのに、この第二皇子の若君は、秘蔵つ子として大切にお育てになることが限りもないのだ。

若宮の母君は―何とかいつても大納言の娘で―入内の初めから、ごく普通の帝付きの女房をなさらなければならぬやうな低い身分のお方ではなかつたのだ。それだけに、いかにも重々しいお方として世間の人からも敬はれ、貴族の出らしいところはあるのだが、帝がむやみにお側にくつつけてお置きになることがあり余るくらゐになると、特にこれといった管絃の御遊びの時々や、その外何でも趣向を凝らした行事のある時々には、どのお后よりも、まづ第一にこの更衣を参上おさせになる。そればかりでなく、ある時には、お寝過ごしになつてお部屋に下りさせないで、そのままお側仕へをおさせになつたりなど、むやみに御前から離れないやうに扱つていらしたうちに、自然身分の軽い帝付きの女房でもあるかのやうに見られもしたので(29)だ、さすがにこの若宮がお生れになつてからは、帝もこれまでとは変つて、特に重々しく扱つてやらうといふおつもりにおなりになつたので、春宮にも、ひよつとしたら、この第二皇子がおなりになることになるかも知れないと、第一皇子（朱雀院）の母女御（弘徽殿）は内心あやぶんでいらつしやる。この弘徽殿の女御は、他のお后よりも真先に御入内になつたので、重々しい第一夫人として御寵愛になることも一通りでなく、お子様方もいらつしやるので、帝も、この女御の御諫言だけは、さすがにやはり知らん顔もできにくい



し、胸が痛めるやうにもお思ひ申しあげていらつしやるのだつた。

桐壺の更衣は、おそれ多いくらゐな帝のお情にお頼り申しあげてはゐるものの、けなしたり、あらさがしをしたりなさる方々が多いし、自分自身は弱々しく、何となく頼りない様子で、帝のお情が厚いだけに、却つて苦しい物思ひをしていらつしやる。更衣のお部屋は桐壺だ。帝はその桐壺まで、大勢のお后方のお部屋お部屋の前をお通り過ぎになりなりして、しつきりなしにお通ひになるので、お后方がやきもきしきつていらつしやるのも、いかにもごもつともと思はれた。更衣が御座所に参上なさるにも、あまりにも度重なる時には、打橋とか渡り廊下とか、その外こやあすこの通り路に、けしからんことをしいしいして、お見送りやお出迎への女房連中の着物の裾が、どうにも我慢のできにくいくらゐ、とんでもないことをすることがあるかと思ふと、またある時には、更衣がどうしても通らなければならぬ中廊下の扉を、こちら側に隠れてゐる者と、向う側に隠れてゐる者とが牒し合はせて戸ざし、更衣を間のわるい目に合はせたり困らせたりなさる時も多いのだ。そんなわけで、何かにつけて、数へきれないほど辛いことがふえて行くばかりなので、更衣はすっかりふさぎこんでゐると、帝はいよいよいぢらしくお思ひになつて、後涼殿（清涼殿の隣）に前々からお側仕へをしてをられる他の更衣のお部屋を外へお移しになつて、その明いた部屋を、更衣の上の御局として下さる。その外に移された更衣の恨みは、――たださへ帝からは忘れられがち、その上お部屋までも――尚更晴らしやうもない。この若宮が三つにおなりになる年、御袴着のお祝ひを、第一皇子のお着けになつた（30）時のお祝ひにも負けないほど、内蔵寮のお宝物や、納殿の御物を使ひ尽すくらゐにして立派になさる。それにつけても、世間から非難ばかりが多いのだが、しかし、この若宮の、だんだんお身大きくおなりになるお顔かたちやお氣立が、世間にもあんまりはありさうもなく、初めて見たといった氣持のするくらゐにまでもお見えになるので、誰もこの宮を嫉みきることもおできにならないばかりか、因果応報といったこの世の理を知つてをられるお方は、こんなに立派なお方もこの末世によくも現れていらつしやるものだなあと、

あきればてるくらゐまで、目を見張つてをられる。

その年の夏、御息所（母更衣）はついちよつとした心地で患つて、お里に下らうとなさるのだが、その退下のお暇をどうしてもお許しなさらない。といふのは、更衣はこの年来、病氣勝ちなのがむしろ普通になつていらつしやるので、帝も見なれていらつしやつて、桐壺帝「やはりもう暫く、宮中にゐるままでなほるかどうか、ためしてみたら」とおつしやるうちに、更衣は日を逐つて重くおなりになつて、ほんの五六日の間に、ひどく衰弱して来るので、更衣に代つて母親が、涙ながらにお願ひ申しあげて、やうやくお里におさがらせ申しあげなさる。しかし、こんな場合にも、とんでもない恥を受けたりすることがあるかも知れないと用心をして、若宮は宮中にお残し申しあげて、人目につかないやうに出かけようとしてをられる。お引止めになるにも限度があることなので、帝も、さうさう引止めてばかりおくこともおできになれないで、せめて見送りだけでもとお思ひになつても、それも御身分がおおできになれないのが氣にかかつて、何ともいひやうのないくらゐにやるせなく思はないではいらつしやれない。いかにも美しくかはいげな更衣が、ひどく面やつれして、いかにもしみじみと何やら物思ひに沈みこみながらも、それをことばに出して申しあげきれもしないで、正体もなく息も絶え絶えになつていらつしやるのを御覧になると、帝はもう前後の分別もつける（31）ことがおできになれないくらゐな氣持におなりになつて、いろいろなことを涙ながらにおつしやつて、これから先のことまでの約束をなさるのだけれども、更衣はもう御返事も申しあげることがおできになれないくらゐ、目もなどともひどくだるい様子で、これまでよりもいよいよなよなよと、正氣を失つた顔色で横になつてゐるので、帝は、これから先、一体どうなるといふのだらうかと途方に昏れないではいらつしやれない。輦車をお許しになる宣旨など仰せ出されてからも、もう一度更衣の部屋におはひりになると、帝はお考へ直しになつて、お里下りを許す氣持にはとてもおなりになれない。桐壺帝「死出の旅路にも、二人のうち、誰か一人でも生き残つたり先立つたりはしまいと、前々からわたしに約束してをられたのだから、万一のこと

があつても、わたしを残したままでは、とても遠い一人旅には行ききれまいね」とおつしやるので、更衣もほんとに勿体ないこととお見あげ申して、

更衣「限りとて別るる道の悲しきにかまほしきは命なりけり

これを最後として、お別れ申して旅立ちますのが悲しいにつ

けても、生きながらへてゐたいのは命でございますことです。

ほんとにこんなことにならうと前々から存じましたなら」と、息も絶え絶えに、まだ申しあげたさうなこともあるやうなのだが、随分苦しうで、そして氣力もなささうなので、帝は、ここでこのまま、どうなるにしても、経過をお見届けにならうと考へていらつしやると、「今日から始めることになつてをります御病氣御平癒の御祈禱などにつき、法力の確かな御祈禱師等が承つてをりまして、今夜から始めますので」と申しあげてお急ぎ立て申しあげるので、どうにもやりきれなくお思ひになりながらも、どうとう宮中からお下らせになつた。

それからあとは、帝はお胸が一杯に塞がつて、まるで、うとうとと目を合はせることもできず、この一夜も、明かしかねていらつしやる。そして、お見舞のお使が行つて歸つて来る間といつたら、大した時間でもないのに、それでもやはり、おれは氣がかりで氣がかりでたまらないんだとしきりに繰り返していらしたが、「夜中を過ぎる頃に、息をお引き取りになりました」といつて、お里の人々が泣きながら、おろおろし(32)てゐるので、お見舞のお使もすっかり拍子抜けのした氣持で、歸つて来てお前に参上した。それとお聞きになる帝は、お心も顛倒して、何も彼も分別をつけることもおできになれず、引籠つていらつしやる。

帝は若宮を、母君が亡くなつても、このままで御覧になりたいのは山々だが、喪中に帝のお側仕へなさるのは先例のないことなので、母君のお里におさがりにならうといふことになる。若宮は何事が起つたかもおわかりにならないで、お側仕への女房連は途方に昏れて泣いてゐるし、帝もお涙がしきりなしに流れてい

らつしやるし、何だか変だとお見あげ申していらつしやるのだが、とにかく普通の場合でも、かうした親子の別れの悲しくないことはないことだのに、まして―これは、母君を亡くされた若宮とのお別れなのだから―まことにお気の毒でもあり、何といったところで甲斐のないことでもある。

いくら惜しんでゐても限りもないので、例によつての作法でなきがらをお葬^{もくろ}め申しあげるについても、母君は、「娘と同じ煙となつて、大空に昇つてしまはう」と、涙の種もなくなくなるほどお泣きになつて、野辺のお見送りの女房の車に、後から追つかけるやうにしてお乗りになつて（『漸く乗せてお貰ひになつて』―愛宕といふところに、―そこではいかに厳肅に葬儀をしてゐるところにお着きになつた時の気持は、どのぐらゐだつただらうか。母君「魂の抜けた御なきがらを見い見にするにつけて、やはりまだ生きていらつしやるのだと思ひますことは、いかにも役に立ちませんので、いつそのこと、灰におなりになつたりするのでもお見届け申しあげて、これでいよいよこの世にはなくなつたお方なんだと、すつかり諦めてしまひませう」と、いかにも分別ありげにおつしやつたけれど、―さてここに来られると、―まるで車からも落ちさうにおろおろしていらつしやるので、「どうせこんなことになるだらうと初めから心配してゐたのですよ」と女房連も、どうお世話をして差しあげたものか当惑する始末。

宮中からお使ひをお差立てになる。そして三位を御追贈^{つるぞう}になる旨、勅使が来て、そのための宣命（口語のみことのり）を読みあげるのは、今更ながら悲しいことだつた。在世中にせめて桐壺の女御とだけでも呼ばせたかつたのに、ついそのままになつてしまつたことが、帝としては不満にも残念にも思はないではいらつしやれないので、せめてもう一階級上の位をでもと、追贈なさるのだつた。かうした破格のお扱ひのあるにつけても、嫌なことだと思つてをられる方々も多い。しかし、物の哀れといった趣を知つてをられる方々は、あの更衣のお姿からお顔かたちから、何も彼も立派だつたことや、氣立もおとなしく感じのよかつたことなどを、亡くなつた今となつて、更めて思ひ出していらつしやる。とにかくみつともないくらゐな帝の御寵愛

ぶり故に、どなたもそつけない態度をして、やきもちを焼いたりなさつたのだが、今となつてみると、人からもしみじみとして、思ひやりの深かつたお氣持などを、帝付きの女房などもお互ひに思ひ出してはなつかしがつてゐる。「誰でも亡くなつてしまふと、その人がなつかしく思ひ出される」といふ古歌は、かういふ場合に詠んだのかと思はれた。

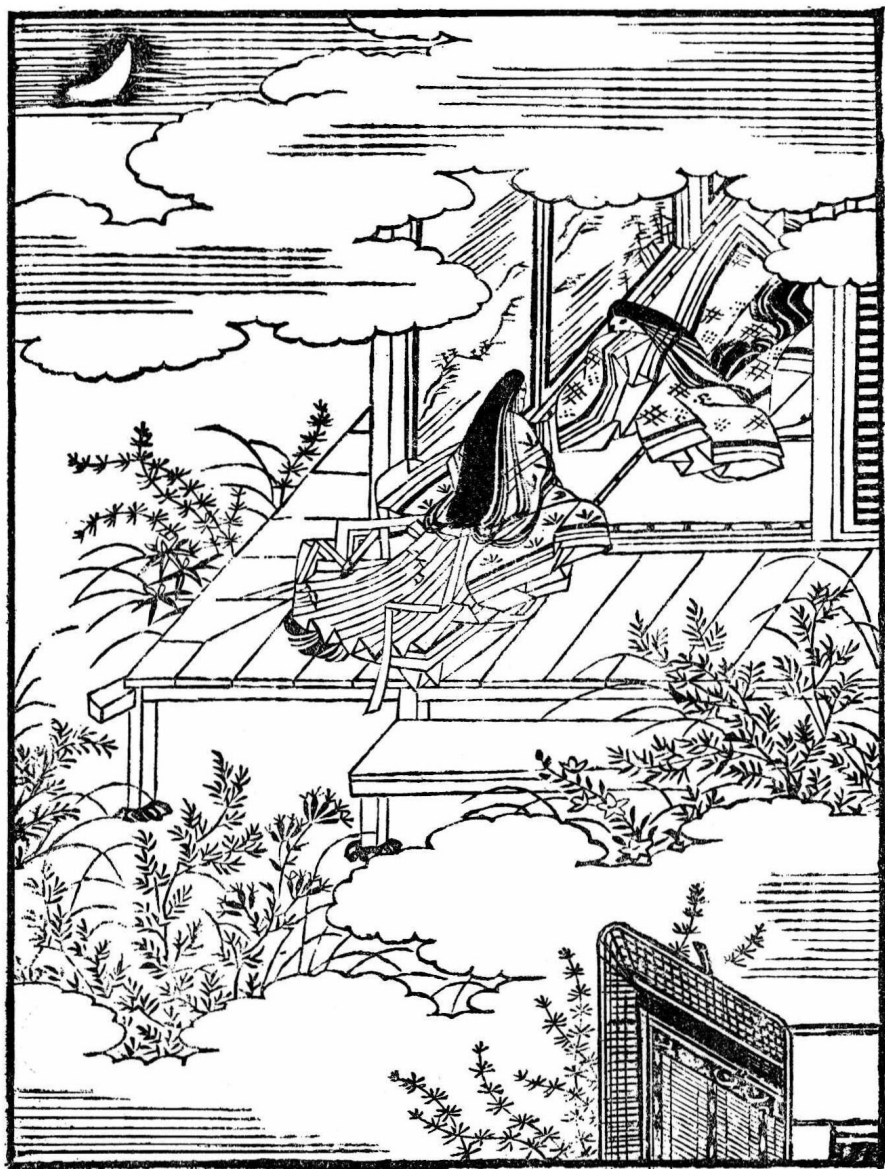
夢のやうに幾日も過ぎて、その間の七日目七日目の供養などにも、帝は懇ろにお見舞ひなさる。時が経てば経つほど、一普通ならだんだん忘れて行くはずなのに――どうにもやりきれないくらゐ悲しく思はないではいらつしやれないので、その後はお后方のお部屋へのお泊りなども全然なさらないで、まるで涙に漬つて夜を明かし日を暮していらつしやるので、お見あげ申してゐる者までも、秋といふ季節も季節も、涙の露を誘はれるわけだ。弘徽殿「亡くなつたあとまで人の胸を晴れ晴れさせようとはしさうもなかつたくらゐ、大変な御寵愛の受け方だつた人だなあ」と、弘徽殿の女御などは、今もつてやはり用捨なくこんなおつしやり方をなさるのだつた。

帝は第一皇子（朱雀）にお目におかかりになるにつけても、若宮（源氏）を恋しくお思ひ出しになりなさるばかりなので、氣心のわかつた女房や御自分の乳母などを更衣のお里へお使としておやりになりなりし（34）て、若宮の日常をお聞きになる。

嵐めいた風が吹き出して、急に冷え冷えとして来た夕暮の頃、いつもよりも更衣をお思ひ出しになることが多いので、韃負の命婦といふ女房をお使としておやりになる。夕方の月の美しい頃にお差立てになつて、帝はそのままぼんやり物思ひに沈んでいらつしやる。かうした夕暮には、管絃の遊びなどをなさつたものだつたが、そんな時にも格別に上手に琴などの音を掻立てたり、ついちよつと口にして申しあげることばでも、やつぱり他の女より特に優れてゐた、あの更衣の姿から顔かたちまでが、幻になつてびつたり寄り添つてゐるくらゐにはつきりと感じないではいらつしやれないにつけ、闇の中で現実相逢ふ方が何とかいひなが

誰でも亡くなつて――あの時はありのすさびにくかりきなくてぞ人に恋しかりける（奥入）

闇の中で現実相逢ふ方が――ぬば玉の闇のうつ



らもまだましなことがつた。

命婦は宮中から下つて更衣のおりに着いて、車を門の内側に引き入れる時からして、雰囲気がいかにもしみじみと感じられる。母君は未亡人暮しだけれど、娘さん一人を立派におもひ立てになるために、お宅にも何かと手を加へて、見苦しくない程度にして過して来られたが、このところ、娘さんを失つた悲しみで、しよげこんでをられた間に、草も高くなるし、おまけに折からの嵐で、尚更荒れ果てた感じがして、月の光だけが茂りに茂つた雑草にもかまはずさしこんであるだけで、人影も見えない。

母君も、命婦に南側の正面に車から下りてもらつて、――さて座敷で対座なさつたところで――早速にはとても物を言ふこともおできになれない。やうやくのことで、母君「今まで生き残つてをりますことが、まことに情なうございますのに、あなたさまのやうな恐れ多い帝のお使が、私どもの荒れ果てた庭の草の露を分けてお越し下さるにつけても、お目にかかる顔もございませんで」とおつしやりながら、おことは通り、とても命までも堪へきれさうもないくらゐに、泣きぐづれていらつしやる。命婦「『お宅様へお伺ひ申しますと、想像以上に、お気の毒で、身も魂も消え失せるやうな気がいたしました』と、いつぞや典侍さまが帝に(35)申しあげていらつしやいましたが、物の哀れなど申しますことは、何も弁へさせていただいてはをりません私どものやうな者の気持でも、典侍さまのおことば通り、ほんとに我慢もいたしにくいことでございます」と申しあげて、暫く涙を抑へてから、帝のお言伝てをお伝へ申しあげる。命婦「桐葉帝『あのあと、暫くの間は夢ではないかとばかり、途方に昏れないではあらなかつたが、だんだん気持が落ちつくにつけても、ほんとの夢なら醒めるとしても、この夢心地は醒めるはずもなく、悲しさに堪へきれなくもあるし、この悲しさを紛らすにはどうしたらいいことなのかと、話を持ちかけることのできる人は一人だつてもあないのだから、人目につかないやうに参内してくれたら、どんなものだらうか。その上、若君も、ほんとに気がかりな暮し方で、涙がちな母親の里で過してをられるのも、お気の毒に思はないではいらつしやれないにつけても、早速

6

つは定かなる夢にいく
らもまさらざりけり
(古今・恋三)

雑草にもかまはず――訪
ふ人もなき宿なれど来
る春は八重葎にもさは
らざりけり(新勅撰・
春上・貫之)

にも参内してくれるやうに」と、はつきりともおつしやりきれないで、あとは涙に咽せ返り咽せ返りなさりながらも、やはり一つには、お側の方も何とまあ気の弱いお方とお見あげ申してゐることだらうと、気兼ねをなさらないでもない御面持のお気の毒さに、おことばを最後まで伺ひ切りもいたしません恰好で、御前から下りました次第」とおつしやりながら、母君へのお手紙をお目にかける。母君「涙に曇つて目も見えませんが、かうした恐れ多いおことばを光として拝見を」と言ひながら御覧になる。帝・文「日数が経つたら、多少でも悲しみを忘れることがあるかも知れないと、待つては過してゐる月日が経てば経つほど、却つてとても我慢がでにくくなるのは、どうにもやりきれないことだね。あの幼い人もどうしてゐるかと、かはいさうには思ひ思ひしながらも、とにかくお前と二人で育てたいのだが、それができないのが気がかりだから、今となつたら、娘の身代りに立つつもりになつて、若宮と一緒に参内してくれたら」など、懇ろに書いておありになる。

桐壺帝「宮城野の露吹き結ぶ風の音に小萩がもとを思ひこそやれ

宮城野（宮中）の露を吹きつけては玉と結んぞあるあのひどい風の音を聞くにつけて

も、小萩一子に掛ける。若宮一の身の上はどうなることかと、かはいさうでならない」

といふ御文面が、涙に目が昏れて、しまひまでは御覧になれない。

母君「娘よりも長生きをいたしますなんて、自分ながら愛相がつきるやうに存じあげないではゐられませんし、あの長命な高砂の松が何と思つてゐるだらうかと考へましただけでも、顔が隠したくなるやうに存じますので、宮中に出入りしたりいたしますことは、まことにどうも、尚更遠慮いたさなければなりません気持も多いのでございまして。恐れ多いおことばを度々頂戴いたしながらも、私の気持では、参内など、とても思ひ立たせていただけさうもございません。若宮様は何とお考へなのか、早く参内なさらうとばかりあせつていらつしやるかにお見受けいたしますのも、ごもつともであり、また悲しくもお見あげ申します次第でな

高砂の松が——いかに
はありと知らせじ高砂
の松の思はむことも恥
かし（古今和歌六帖・
五）